

江戸時代における立雛の服飾表現の意義と役割

榑崎久美子

(2012年10月10日 受理)

The Expressions of Attire of Standing Dolls in Edo Period, and its Significance

Kumiko NARAZAKI

Abstract

As an annual event to pray for girls to grow up well, the “doll festival” is widely known in modern Japan.

The custom of the doll festival became established during the Edo period, and is said to have been such a luxurious spectacle at times that the feudal government banned it. But are the dolls merely luxuries of exhaustive splendor and wealth? Or, is there some objective in donning such gaudy attire?

Here, we separated the dolls into the following four types by classifying and analyzing the expressions of attire for the dolls, based on the diagrammatic image data regarding the standing dolls:

- (1) Standing dolls as toys
- (2) Standing dolls as the main characters of the doll festival
- (3) Standing dolls as juxtapositions to seated dolls
- (4) Standing dolls as arts and crafts

Further, the significance of the standing dolls is that parents on behalf of their children for health and happiness either for several years after they were born or when they were children. Since the middle of the Edo period, it included the pray for good marriage.

I は じ め に

女子の成長を願う年中行事として「雛祭り」は、現代日本においても広く知られたものである。人形屋やおもちゃ屋が豪華な八段飾りの雛人形やマンションなど限られたスペースでも飾ることのできるケース入りの内裏雛を展示し販売しているのは、季節の風物詩としてよく目にするものであるし、大手スーパーなどでは一ヵ月も前から当日に食べるケーキや寿司などの予

約販売を行い、イベント化している。

「雛祭り」の主役たる雛人形は先にも述べたように、現在様々な種類を見ることができるが、服飾のきらびやかさ、華やかさは特筆すべきものである。特に金糸銀糸を使い、絢爛豪華な錦からぎぬもの唐衣裳風の女雛の装束は女子でなくとも心を躍らせるものであろう。

雛祭りの風習は江戸時代に一般化し、幕府からは禁令¹⁾ も出るほど豪華なものも見られた。雛人形とはただ、豪華で贅を尽くすばかりの嗜好品なのであろうか。あるいは、何かの目的があってきらびやかな服飾をまとうことになったのであろうか。

これまで雛人形については、山田徳兵衛による『図説 日本の人形史』²⁾、有坂與太郎による『日本玩具史（前篇）』³⁾、藤田順子による『雛と雛の物語り』⁴⁾ など図像資料、現存資料などを列挙し、雛祭りの起源、雛人形の種類、雛飾りの種類などを取り上げたものがある。例えば『図説 日本の人形史』の中では図像資料をもとに、江戸時代に商業が盛んとなり、豪華な雛人形が流通していくさまをまとめているが、雛人形そのものの服飾表現からの研究は見当たらない。

そこで、本論では雛人形のうち、立雛に関わる図像資料をもとに、江戸時代の雛人形の服飾表現を分析し、どのような変遷をたどったか、またどのような意義があるのかを明らかにするのが本論の目的である。

なお、図像を資料として扱うことは写実ではないため不確定要素を含んでいるが、服飾研究においては複数の図や文献を用い、描かれた年代のはっきりしたものを資料とすることでカバーしている。

Ⅱ 立 雛 と は

3月の節句の飾り物として雛人形が成立した際、最も初期のものであるとされているのが立雛である。書いて字のごとく、夫婦になぞらえた女雛と男雛が立っている様子を表現したもので、材質は紙が主であるとされている。シルエットとしては、男雛が両手を広げ、女雛は両手をすばめた、すとした立ち姿のものが多い。

現在のように豪華な雛人形を飾り、甘酒を飲んだり草もちを食べたりする、という風習は江戸時代中期にはじまったと言われている。ただ、これまで雛祭りの起源は多くの研究者によって取り上げられてきたが、はっきりとはしていない。というのは「ひな」という言葉が女兒の玩具人形である「ひひな」の存在やケガレを祓う「流し雛」の風習などの意味や風俗が複雑に絡み合い、雑然としているからである。その点については本論から外れるため追求しないが、ともかく、現在の雛祭りの原形となる江戸時代の雛人形の初期のものが立雛であることには疑いがない。

立雛は、江戸時代においては座り雛と共に飾られることが多くあった。また、豪華な座り雛が買えない地域や家庭でも紙製の雛人形は手作りされ、雛祭りの主役として使用されていたようである。例えば鳥取県用瀬町では紙で作った立雛をさんだらぼうという棧俵に乗せて流す行事が現在でも行われており、水に流すことで穢れを祓うという意味を伝えている⁵⁾。このように紙を用いて雛人形を作ることこそ特別なことではないのである。つまり、立雛は雛人形の原型であり、かつもっとも簡易な雛人形として習俗的なものであると考えられるのである。

Ⅲ 立雛の服飾表現

1. 玩具としての立雛と宮参りのための立雛

では、立雛にはどのような服飾表現がなされているのであろうか。年代を追って、図像資料を提示する。

図1-(1)は1670年刊行の『おさな源氏物語』の挿絵である。『おさな源氏物語』は著者である野々口立圃(1595～1669)が子どものために源氏物語を簡単にまとめたあらすじ本であり、挿絵が入っていることで、よりその内容が把握できるよう工夫されたものである。第7帖「紅葉賀」で若紫が人形遊びをしている場面の中に、立雛風の人形が確認できる(図1-(2))。男雛、女雛風の人形が両手を広げて箱に立てかけられている。これまでの研究において、貴族の女兒の人形遊びはその他の平安文学からも見受けられることが指摘されており⁶⁾、おそらくはこういった様子であったのであろうが、その遊びの中に立雛が使用されていることが確認できる資料である。

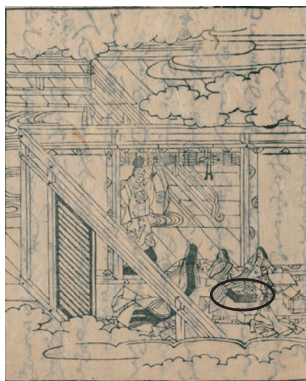


図1-(1) ひいな遊びをする若紫
(『おさな源氏物語』寛
文10(1670)年刊)



図1-(2) 立雛①(図1部分拡大)

この挿絵を描いた野々口立圃が公家文化に通じており、その知識をもとにこの挿絵を描いた可能性があるのかどうかは確認する必要がある。というのも、江戸時代初期には武家の子女や裕福な町人に向けて出版された簡易版『源氏物語』⁷⁾は多く見られ、挿絵は画家によって異なっているのである。よって、この挿絵に出てくる玩具、人形の様子は著者の体験あるいは想像による描写によるものであるとも考えられる。

ともあれ、過去の挿絵入りの簡易版『源氏物語』をそのまま模倣するのではなく、作者によって人形の描き方が異なるということは、作者の考えが反映されたと解釈でき、野々口立圃にとっては立雛が女兒の玩具として身近なものになっていることを示唆している。

1600年代後半において、立雛が雛祭りのためのものではない、という例はほかにもある。



図2 立雛②③ (奥田松柏軒『女用訓蒙図彙』貞享4 (1687)年)



図3 立雛④ (図2と同じ)

図2は貞享4 (1687)年に発行された奥田松柏軒著『女用訓蒙図彙』^{おんなようきんもうずい}のうち、巻一の中の「女器財」^{おんなのうつわもの}の項の絵図である⁸⁾。二対の立雛が見られ、上部の立雛は小さく、折烏帽子あるいは風折烏帽子、侍烏帽子をかぶり、垂領で袖丈の長い振袖の衣をまとっている。袴をはき、上衣は下衣に入れた状態である。女雛は小さくて分かりにくい、上衣と帯が見受けられる。文様はついていない。下部の立雛の男雛はこれも折烏帽子、あるいは風折烏帽子をかぶり、藤の文様のついた袂の大きな振袖をまとっている。上衣は腰から袴に入れ込まれている。女雛は垂髪で、両手を重ね、上から帯を巻いている。上衣には桔梗とみられる文様が描かれている。用途は特に書いていないのでわからないが、「女器材」に描かれている他のもの⁹⁾から鑑みるに、調度品や手回り品のたぐいであると考えられる。

続いて、図3も同じ『女用訓蒙図彙』の「宮参髪置」^{みやまいりかみおき}の項に掲載されている。図2より鮮

明な雛の図で、男雛は風折烏帽子と思われる冠をかぶり、垂領の上衣が振袖であることがはっきり描かれている。文様は藤と桔梗で、上衣を袴に入れ込んでいる。女雛は垂髪で垂領、大袖の衣は上部に藤、下部に菱か、扇の連続紋である。髪の下がり端が帯に入れ込まれている描写が目を引く。

なお、女性の持ち物として雛が上げられること、同時に同じ本の中の「宮参髪置」という人生の節目に当たる行事の際に必要なものとして雛が上げられているのはこれまでの研究では取り上げられておらず、特筆すべきである。つまり、立雛が三月三日の節句に限定されて用いられるもの、という認識はこの時点ではない、と解釈できるのである。

2. 飾るための立雛

それでは、いつごろから立雛を飾るようになったのであろうか。

図4-(1)は1688(貞享5)年刊行の貝原恥軒著『日本歳時記』巻三の挿絵である。日本の年中行事をまとめたこの本の中で、三月三日の行事の挿絵として、屏風の前に座り雛と共に立雛が壁に立てかけるように飾ってある様子が見て取れる(図4-(2))。服飾は、男雛が風折烏帽子に垂領で、大きな袂の上衣を着ている。下衣については判然としない。上衣の文様についても小さすぎて判然としない。女雛については垂髪で衣をまとい、やはり帯で体を巻いている。こちらにも裾に文様があるが、単純な線で表現してあるため何の文様であるかは確定できない。

この『日本歳時記』では三月三日の行事として闘鶏とともにこの雛を飾る様子を紹介している。つまり、座り雛とともに立雛を飾ることが雛祭りの一般的な飾り方であることが示されているのである。

図5-(1)は元禄7(1696)年に刊行されたとされる嶋順水編『俳諧童子教』¹⁰⁾に掲載され

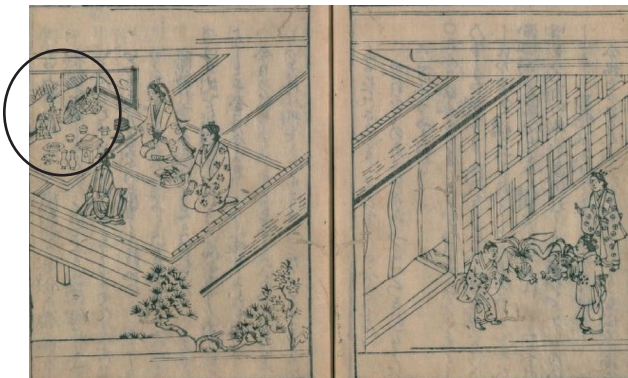


図4-(1) 三月三日の様子(貝原恥軒『日本歳時記』貞享5(1688)年)



図4-(2) 立雛⑤(図4部分拡大)

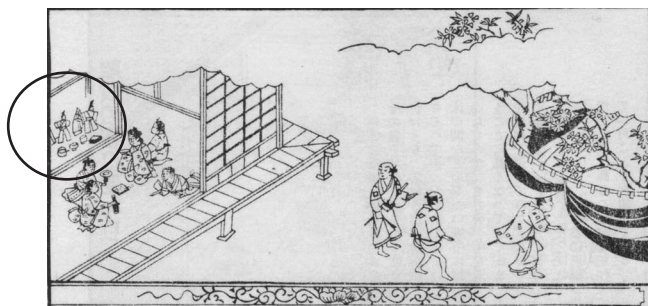


図5-(1) 雛飾りの様子(嶋順水『俳諧童子教』元禄7(1696)年)



図5-(2) 立雛⑥⑦(図5部分拡大)

ている雛飾りの様子である。立雛二対が立てかけて飾られている。装束の文様は男雛女雛とも描かれていないが、男雛は立烏帽子か風折烏帽子をかぶり、盤領風の衣である。両男雛とも二幅の袖を示す線が描かれ、袖口が大袖である。女雛は一体しか全体像がわからないが、紐で体を巻いている様子が見てとれる。

掲載された俳句に対して挿絵が一つ一つ掲載されるこの書籍で、雛の前で饗応している様子が見えてくる。歌の内容から男児が集まっているのだが本来は女子が集まっていたのであろう。このように1680年代後半から立雛を飾る、という風習が行事化していったのである。

3. 座り雛との共存

立雛はその後、座り雛とともに雛祭りを彩るようになる。『日本歳時記』でも座り雛が立雛と共に並んで飾ってあったが、1700年代に入るとそういった描写をよく見かけるようになる。

図6-(1)は宝永9(1709)年に刊行された奥村政信著『紅白源氏物語』巻2の挿絵である。図1と同じ第7帖「紅葉賀」の場面で、若紫が雛遊びをしている様子を描いた様子である。座り雛を飾った台の前に立雛を置いている様子が見られる。男雛は烏帽子をかぶり垂領の衣を袴の中に入れて込んで、両腕を広げている。女雛も垂領の上衣をまとい、腰ひもから下は何の装飾もない。

なお、源氏物語原文では

「いつしか雛をしすゑてそそきぬたまへる、三尺の御厨子^{ひとよろい}一具に品々しつらひすゑて、また、小さき屋ども作り集めてたてまつり奉へるを、ところせきまで遊びひろげたまへり。」¹¹⁾

となっているが、この挿絵には図1と異なり、人形遊びの道具や人形の家もない。雛祭りで座り雛と立雛を飾る、という様子をそのままに描いたように感じられ、物語の挿絵としては違和感を覚えるものである。また、座り雛が縁綯台座に座り立雛はその下で立てかけられているこ

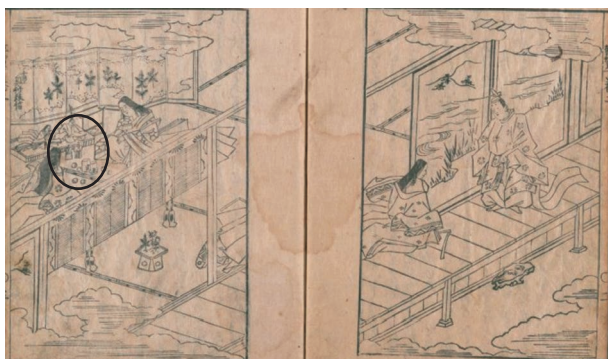


図6-1) 雛遊びの様子（奥村政信『紅白源氏物語』巻二 宝永9（1709）年）



図6-2) 立雛⑧（図6部分拡大）

とから、立雛は座り雛の添え物であるような印象を受ける。

図7は享保2（1716）年刊行の『世間娘気質』の挿絵¹²⁾である。町人の娘を素材として、様々な娘像を面白可笑しく描いた浮世草子に描かれた男雛と女雛はこれまでのものと違い、どちらも体を帯で巻かれた、女雛形式で描かれている（図7-2）。男雛はこれまでの男雛と異なり、冠であることが明らかである。女雛は垂髪である。女兒の膝元にも髪を抜かれた座り雛と立雛の頭と胴体の部分が転がっており、同じ服装の一对である。冠をかぶった頭部は男雛のもので、こちらには纓が見られる。

図7においては座り雛と立雛は同一の台の上に飾っており、どちらが中心的存在であるかは確定できない。まさに共存しているといえる飾り方である。



図7-1) 雛祭りの様子（江島其碩『世間娘気質』享保2（1716）年）



図7-2) 立雛⑨ (図7部分
拡大)



図7-3) 首を抜かれた雛 (図7部分
拡大)

4. 華やかな装飾を施される立雛

さらに時代が下って来ると、立雛の服飾表現が華やかになってくる。

図8は享保17(1729)年刊行の広沢嘉兵衛著『女^{おんな}蒙^{もう}求^{きゅう}艶^{うつつや}詞^{ことば}』^{かしらがき}の頭書の挿絵である。京都で出版されたこの本に描かれた挿絵の中で立派な屏風を背景に女の膝元に立雛が描かれている。男雛を持ち、周りには雛道具を置いている。男雛は烏帽子をかぶり、藤の文様が入った振袖を着、袴をはいている。また、床には垂髪に帯で体が巻かれた女雛が確認できる。女雛の上衣の文様は判然としないが、丸い形が見て取れ、描かれた女や調度品同様豪華な雰囲気を感じる。

図9は度会直方著、西川祐信画の寛延2(1749)年刊の『雛あそび乃記』の挿絵である。度会は神道学者、国学者であり、この本によって女子への教訓を述べている。これを参考にこれまでの先行研究は雛祭りについての文化を語っていることが多く、この絵本は図5、6の出典



図8-1) 雛を持つ女 (広沢嘉兵衛『女
蒙求艶詞』享保17(1729)年)



図8-2) 立雛⑩ (図8部分
拡大)

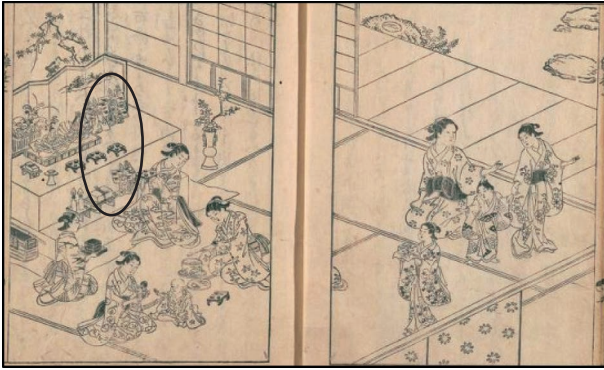


図9-(1) 雛飾りの様子(度会直方『雛あそび乃記』寛延2(1749)年)



図9-(2) 立雛⑪⑫⑬(図9部分拡大)

である『日本歳時記』に次ぐ雛祭り文化に貢献した書物であるといえる。

町人あるいは武家風の屋敷では室礼も見事に、立雛と座り雛が並んで飾ってある。三対の立雛はすべて男雛が折烏帽子風の冠をかぶり、盤領の上衣に身を包み、雲と芝か波のような文様が描かれている。袴は麻文様、菊文様、唐草文様と異なっている。女雛は隠れているため服飾表現はわかりにくい、上衣は雲の文様を確認することができる。また、垂髪である。

図10は寛延4(1751)年に発行された北尾辰宣(雪坑斎)作・画『日用重宝 女諸礼綾錦¹³⁾』に掲載されている立雛である。男雛は少し形のゆがんでいることから単なる烏帽子ではなく、折烏帽子だと思われる頭部装飾を用いている。そして振袖を着ている。文様は松と州浜であり、高砂、あるいは『源氏物語』の須磨の段を想像させる。こちらも上衣を袴の中に入れていいる。女雛は垂髪で、男雛と同じ文様の上衣をまとい、細い帯で体を巻いている。男雛、女雛とも内側に着ている衿は縞であり、これまでの立雛と比べより装飾性の高さをうかがわせる。

図11は江戸中期(1700~1800年)発行とされる『寺子用文章宝箱』の挿絵である。画面には四対の立雛が壁に立てかけて飾ってある。男雛の頭部装飾は見えないが、男雛も女雛も同じ文様の服飾表現であり、雲に露芝、あるいは波とみられる文様を配している。男雛は振袖袴、女雛は垂領の上衣である。これまでに登場したものと比べてかなり大きな立雛で、座り雛が見られないことから、この家では立雛が雛飾りの主

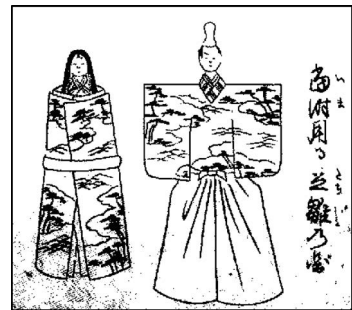


図10 立雛⑭(北尾辰宣『日用重宝 女諸礼綾錦』寛延4(1751)年)

役になっている。

また、図9と同じように、人形の前には瓶子に熨斗口を添えている。また、御伽犬が見える。これは子どもが生まれた時の魔よけとして使われているものとして、雛人形とよく一緒に飾られるものである。

なお、『寺子用文章宝箱』の出版年は明らかでないが、描かれ方が『日用重宝 女諸礼綾錦』とほとんど同じであることから同時代のものであると考えられる。

図12は宝暦（1751～1764）年間に刊行された上方子供絵本で馬淵光信画とされる年中行事本『吉日増見鑑』の挿絵である。これは女中たちによって立雛が運ばれて来た様子を描いたところで、入れ物に載せられた立雛が中央に添えてある（図12-（2））。その服飾を見ると、男雛は烏帽子をかぶり、垂領らしき上衣であるが、これまでのものと異なり、袴の上に上衣の裾のようなものが見える。文様は振袖にも袴にも描かれているが何の文様かは判然としない。女雛は垂髪で、帯で体を巻き、文様はこちらも判然としないが装飾性ははっきり認められる。

このように立雛は徐々に装飾性を持った存在へと変化していったのであるが、それはどのように人々の手に渡ってきたのであろうか。



図11 立雛⑮（『寺子用文章宝箱』
鱗形屋孫兵衛／いとや市兵衛
出版 江戸中期）



図12-（1） 雛を準備する様子（馬
淵光信画『吉日増見鑑』
宝暦年間）



図12-（2） 立雛⑯（図
12部分拡大
かつ回転）

5. 雛市における立雛

1800年代に入ると、立雛も座り雛と共に雛市で販売されるようになった様子。そこに描かれている立雛はどのように表現されているであろうか。

図13, 14は文化2（1805）年ごろの江戸日本橋を描いた絵巻『^{きだいしょうらん}熙代勝覧』の一部である。作者は不明である¹³⁾。この中に雛市の様子が描かれており，その中に不鮮明ではあるが立雛も売られていることが確認できる。

まず，図13－(2)では一対の立雛が見られる。男雛は両手を広げ，冠か，烏帽子をかぶっているようである。また，色分けされた上衣は下衣に入れ込まれ，袴をはいている。女雛は緑色で上衣を着ている様子があらわされている。

また，図14－(2)は一対の，図14－(3)は二対の立雛が売られている。これらの細かな服飾



図13－(1) 十軒店の雛市の様子①（『熙代勝覧』文化2（1805）年）



図13－(2) 立雛⑰（図13部分拡大）



図14－(1) 十軒店の雛市②



図14－(2) 立雛⑱（図14部分拡大）



図14－(3) 立雛⑲⑳（図14部分拡大）



図15-1(1) 京都の雛市の様子（速水春曉斎『諸国図会
年中行事大成』文化3（1806）年）

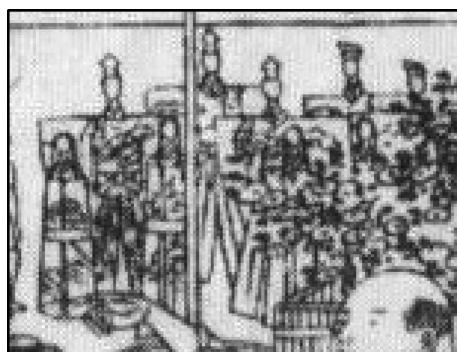


図15-2(2) 立雛㊟（図15部分拡大）

表現は判然とはしないが、男雛は振袖で袴をはいていることは確認できる。図14-（2）の雛は男雛女雛ともに、同色でいかにも対らしく、図14-（3）は青や緑、朱や白と男雛女雛ともに色彩のバリエーションがある。

図15は文化3（1806）年刊行の『諸国図会年中行事大成』に掲載されている京都の雛市の子の一部である。雛祭に飾るための人形が一堂に集まる中に、装飾豊かな立雛を見つけることができる。

ここで注目したいのが男雛の頭部である。これまではっきりとしてなかったが、この図から男雛の頭部装飾は2種類あることが確認できる。一つが、図の左側に固まっている男雛三体がかぶる侍烏帽子、もう一つは右側二体がかぶる風折烏帽子である。また、一番左と左から二体目の男雛は振袖を着ているように見える。

女雛は四体確認することができるが、いずれも垂髪で、垂領の上衣に、帯で体を巻かれた状態であり、一つ一つに大きな違いはない。

なお、文様については一番左の女雛は松と波、その隣の男雛は上衣に松、袴は七宝つなぎ、その隣の女雛は松に藤、その奥の男雛は袖の辺りに松が見える。それ以外の雛については何らかの文様が入っていることは間違いないが、図が小さいため判然としない。しかし、手の込んだ服飾表現が文化年間に入ると立雛にも行われていることは、明らかである。

6. 絢爛豪華な立雛

19世紀にはいると更に立雛は豪華になってゆく。現存する資料¹⁴⁾と変わらないような文様を施された立雛が多く見られるのである。

図16は天保8（1837）年発行のあかつきかねなる 暁鐘成編・画『童子往来百家通』の挿絵である。男雛は侍烏帽子を被り、脇に切れ込みのような線が見えることから、振袖であると考えられる。振袖には藤と松の文様が見られ、袴には丸文が描かれているが、はっきりとはしない。女雛は垂髪で、男雛と同じ松に藤の文様である。



図16 立雛②（暁鐘成『童子往来百家通』天保8（1837）年）

図17は天保12（1841）年刊の木村繁雄編、蔀関牛（徳風）・森有煌（春溪）画『新增 女諸礼綾錦』下巻に掲載されているものである。なお、下巻は蔀関牛が作画である。『新增 女諸礼綾錦』は図17が掲載されている『日用重宝 女諸礼綾錦』の内容をふまえた上で、当時の情勢に合わせて加筆修正され、改めて刊行された書物である。挿絵についても、『日用重宝 女諸礼綾錦』とは異なっているため、刊行された当時の風俗を反映していると考えられる。

男雛は両腕を広げ、折烏帽子のような冠をかぶっている。振袖に袴の腰ひもがはっきりと描かれている。文様ははっきりとしていないが雲がたなびいているのであろうか。袂にも文様が見られる。女雛は垂髪であることはわかるが、上衣の文様は判然としないが華やかな表現であることは明らかである。

また、子どもの守り人形である這子¹⁵⁾が女雛の横に添えてあるのが特徴的である。図8や図11には御伽犬宮が、また、今回発行年などの詳細がはっきりしなかったため取り上げられなかった雛飾りの様子を描いた画像資料にも御伽犬とともに這子が共に飾っているものがあり、女兒の健康を祈る儀式としての雛祭りの様相を残しているといえる。



図17-（1）雛飾りの様子（木村繁雄『新增 女諸礼綾錦』天保12（1841）年）



図17-（2）立雛③（図17部分拡大）

7. 錦絵の中の立雛

江戸時代も終盤になると雛人形の文化は他の文化にも影響を与えている様子がわかる。

図18は弘化（1844～1848）年間に歌川国芳によって描かれた錦絵である。右上が立雛であるがこれまでのものと違い、ずいぶんと表情が豊かに表現してある。それもそのはず、男雛が中山市蔵、女雛は市川箱右衛門に見立てているからである。

服飾表現を見ると、男雛は金の烏帽子をかぶり、紺地に梅と笹、そして唐草を散らした直衣風の上衣をまとっている。胸元と袖には五三の桐の紋が入っている。袴は黄色地に黒・緑の立縞模様である。女雛は男雛に隠れているが、頭頂部にお団子状に髪をまとめた上で、垂髪としている。上衣は、赤い地に撫子が確認できる。他にも文様が見受けられるが、何の花かは判然としない。袴は緑地に浮線菱のような文様が入っている。

歌舞伎役者の見立て絵であることから、その服飾表現も歌舞伎に近いものだと考えるべきではあるだろうが、女雛の下衣は縦線が入っており、裳のようにも袴のようにも見えるところが興味深い。

図19は弘化4（1847）～嘉永3（1850）年に三代目歌川豊国（三代）が描いた錦絵である。豪華絢爛な雛段を背景に、歌舞伎役者が立っているその腰のあたりに男雛と女雛が描かれている（図19-（2））^{16）}。女雛は歌舞伎役者に隠れてほとんど見えないが、男雛についてはこれまでのものに比べて服飾の様子はかなり詳



図18 「見振十二思ひ月」「三月」
（歌川国芳 弘化（1844～1848）年間）



図19-（1） 雛女夫桃の細眉
（部分）（歌川豊国
（三代） 弘化4
（1847）～ 嘉永3
（1850）年間）



図19-（2） 立雛②（図19部分拡大）

細にわかる。風折烏帽子をかぶり、雲が肩を覆い、松と藤の花の文様の入った振袖をまといっている。袴の腰ひもはしっかりと結んである。袴は三枳文様という、稲妻文様が発展したものが全体に描かれている。三枳文様は歌舞伎役者である市川団十郎の定紋として知られており、庶民に流行した文様とされており、身近でかつ華やかな印象を与える。

図20も三代目歌川豊国によって嘉永（1848～1854）年間に描かれたとされる錦絵である。右上に立雛が描かれている（図20－(2)）。

服飾は男雛の上衣にも女雛の上衣にも同じ雲、藤が配されている。雲の中には亀甲に花の文様が見え、有職文様を配していることがわかる。男雛の冠は風折烏帽子のようである。振袖は袴に入れられ、赤い腰ひもが色彩をより華やかにしている。男雛の左腋（雲の文様の右側）が開いており、内側に着こんだ赤の衣が見える。袴は細かい稲妻文様が配されている（図20－(3)）。女雛は垂髪で、赤く見える下衣は緋袴であるように思われる。



図20－(1) 「五節句之内さくら月」(歌川豊国(三代) 嘉永(1848～1854)年間)



図20－(2) 立雛㊟(図20部分拡大)

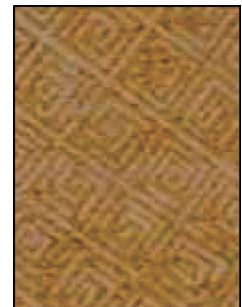


図20－(3) 袴の文様(図20部分拡大)

以上、1670年から嘉永（1848～1854）年間にかけて散見される立雛の画像資料から、服飾表現を中心に分析を行った。その結果、立雛の服飾に施される文様は時がたつにつれ華やかに、豪華に変化していくが、着装自体は初期の状態がほぼ踏襲されていることが明らかになった。この着装方法については今後の研究課題とする。

Ⅳ 立雛への意識の変遷

これまでに見てきた立雛を分類すると、①玩具としての立雛、②雛祭りの主役として用いる

立雛、③座り雛の添え物としての立雛、④豪華な調度品としての立雛の4種類に分けることができる。

①については、三月三日の節句とは全く関係がないものである。雛祭りという文化は存在せず、江戸時代において平安時代を表現する際に女兒の玩具として立雛があり、その服飾表現は大変単純なものであると言える。

ただし、特筆すべき服飾表現は、『女訓蒙図彙』において立雛に描かれた文様が藤＝不死、桔梗＝更に吉、扇＝末広がり、といった吉祥文様であることである。立雛が持ち主の幸福を祈るためのものであるという性格を表象していると考えられる。

②が生まれた背景には、太平の世における武士や町人の「文化」や「儀礼」への憧れが見てとれる。三月三日を上巳とし、曲水の宴を催すことは平安時代から公家社会では行われていたが、武家社会ではそのような雅な風習は確立していなかった。そこで江戸幕府は五節句を決めるなど、政治体制の中に年中行事を取りこみ、文化的に向上しようとする姿勢が見受けられる。そういった背景を持って、ヒトガタとしての流し雛文化を昇華させ、年中行事としての雛祭りに用いる人形として、立雛が誕生したのだと考えられる。その意匠は、神事に用いる紙で作ったごく単純なつくりのヒトガタから来たとも、天児・這子と呼ばれる赤子を模した綿と布、または木の棒でできている素朴なつくりの人形からきたとも言われている¹⁷⁾。今回示した画像資料においても、描こうと思えば描ける文様がどれにも入っていないという服飾表現も、それに由来しているからではないかと考えられる。つまり、何の飾り気もない「素朴」な服飾表現は清浄を表象し、女兒の成長を祈願する行事に用いるヒトガタとして機能するためには十分な意匠であったと考えられる。

③については、座り雛の発展と関係があろう。江戸や京都の人形師たちが独自の座り雛を創作し、衣裳や顔立ちに工夫を凝らすようになると、自然とヒトガタや天児・這子の意匠を背景に持つ立雛は主役を張ることが難しくなる。そして町人たちが買い求める座り雛には官女や五人囃子など随人が増えてゆき、一緒に飾る婚礼に関わる道具が付属していった。座り雛を飾ることは女兒の、というよりは女子の将来への願いを継続的に表象していると考えられる。初雛や宮参りなど女兒の成長を祈る思想は途絶えることなく、素朴な作りの立雛は雛祭りの添え物として残っているのである。

最後に④についてであるが、雛人形、雛祭りが急速に広まっていった背景には、儒学的な考え方や、神道との関わりが挙げられる。

江戸中期に様々な目的で刊行された女子教養書には、雛人形と雛の調度品を用いて嫁いだ際の家事の練習を行うとか、スクナヒコの例を取り、小さいものへの信仰などが説かれている。また、雛祭りを行うことは幸せな結婚につながるものとして表現されている。また、三月四日

に雛をしまうことを納雛といい、これを怠ると婚期を逃すという考え方もこのころに生まれたものである。そういった意識から雛祭りは女性の幸せを特別に祈る非日常の祭りとなったと考えられる。

つまり、ハレの行事の主役である雛人形は座り雛だけでなく、立雛も室内調度の一つとして必然的に装飾性を求められるようになり、単なる紙ではなく、色とりどりの文様の入った高級な紙や裂などを用いて作られるようになっていったのだと考えられる。

そして立雛に描かれる服飾表現も、初期こそ①と共通した吉祥文様としての藤の文様が確認できたが、それ以外に様々な文様が描かれるようになり、更には松と藤が男女の和合を表すことから、人ひとりの健康や幸福という漠然とした祈りではなく、幸せな結婚という限定された願いを表象するようになっていく。つまり④は、女兒の健康や幸福を祈り、さらには嫁ぎ先での幸せへの願いをかなえるべく、華やかな色彩や文様を備えた服飾で表現されたのである。

以上、管見の限りの江戸時代の立雛は、①～④のように服飾表現が変化し、その意義は生まれてから数年、あるいは子どもの時分の健康や幸せを祈るという親から幼児への祈りから、江戸中期以降になると結婚に限定した女性自身への願いの表れも付加されていったのである。

注

- 1) 『御触書宝暦集成』によると宝暦九卯年閏七月に雛は八寸より大きいものは用いてはならない、という儉約の御触書が出ている。
- 2) 東京堂出版 1991年
- 3) 建設社 1931年
- 4) 暮しの手帖社 2003年
- 5) 『雛と雛の物語り』ではさんだわらに乗せられて流される雛の写真が掲載されてるが、雛のシルエットは立雛と同様のものである。また、『雛人形』（切畑健 京都書院 1998年）にも全国各地の流し雛、護り雛が掲載されているが、多くは同様のシルエットである。『ひいな 歴史の中の人形』（龍野市立歴史文化資料館編 2004年）にも流し雛や地方の雛が掲載されている。
- 6) 『枕草子』『栄花物語』などにひな人形についての記述が見られる。
- 7) 国立国会図書館デジタル化資料によると、慶安3（1651）年に出版された出版者不明の『源氏物語』、明暦3（1657）年に耕雲（花山院長親）ほか著、安田十兵衛出版の『源氏子鏡』、万治3（1660）年に林和泉掾出版の『源氏物語』などに挿絵が入っていることが確認できる。
- 8) 『女用訓蒙図彙』は祝言や婚礼に関わる事物をまとめた女性教養書である。
- 9) ほかに貝桶、屏風、墨、筆、短冊箱、歌賀留多、和琴、象戯盤しょうぎのばん、菓子盆など全78図が収録されている。
- 10) 『俳諧童子教』は子供向けの俳諧集で、啓蒙的な一面を持つ俳書である。京阪俳談の巨匠つけあいの附合（2人で五・七・五の長句と七・七の短句を付け合わせることを）を掲載している。
- 11) 阿部秋生ほか『新編日本古典文学全集 源氏物語1』 小学館 1994年 pp. 320-321
- 12) 『八文字屋本全集』（八文字屋本研究会編 汲古書院 1994年）の解題によると画者は西川祐信と推定されているが別筆も混じっているとのことである。

- 13) 内題は女諸礼集大全である。
- 14) 『雛人形』(注5参照)には幕末、あるいは現代の立雛も多く掲載している。
- 15) IVで詳述する。
- 16) 1830年ごろに『修紫田舎源氏』挿絵を担当した歌川豊国は、それを題材に錦絵を描いており、図19はそういった作品の一つである。
- 17) 西澤笛畝は昭和3(1928)年刊行『雛』でヒトガタと天児・這子、姉様人形などがすべて融合して立雛ができたとして述べている。また、図17の掲載されている『日用重宝 女諸礼綾錦』でもヒトガタが起源であると述べてあり、神事に用いるヒトガタも図解されている。

図出典一覧

- 図1 ひいな遊びをする若紫 野々口立圃『おさな源氏物語』10巻[1] 38コマ目
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2546469/38> 国立国会図書館 HP デジタル化資料より2012年10月転載
 許可受領済
- 図2, 3 立雛②③及び立雛④ 奥田松柏軒『女用訓蒙図彙』(江戸時代女性文庫97) 大空社 1999年
- 図4 3月3日の様子 貝原恥軒『日本歳時記』7巻[3] 18コマ目
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2563535/18> 国立国会図書館 HP デジタル化資料より2012年10月転載
 許可受領済
- 図5 雛飾りの様子 嶋順水『俳諧童子教』(新編稀書複製會業書 第3編 俳諧・狂歌) 凜川書店 1990年
- 図6 雛遊びの様子 奥村政信『紅白源氏物語』5巻[2] 4コマ目
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2546462/4> 国立国会図書館 HP デジタル化資料より2012年10月転載
 許可受領済
- 図7 雛飾りの様子 江島其碩作 西川祐信画『世間娘気質』(八文字屋本全集 第6巻) 汲古書院 1994年
- 図8 雛を持つ女 広沢嘉兵衛『女蒙求艶詞』(江戸時代女性文庫97) 大空社 1998年
- 図9 雛飾りの様子 度会直方作 西川祐信画『雛あそび乃記』2巻 13コマ目
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2533856/13> 国立国会図書館 HP デジタル化資料より2012年10月転載
 許可受領済
- 図10 立雛⑭ 北尾辰宣作・画『日用重宝 女諸礼綾錦』(江戸時代女性文庫40) 大空社 1995年
- 図11 立雛⑮ 相川仁童『絵図集成 近世子どもの世界 絵図編第5巻』P.489 大空社 1995年
- 図12 雛を準備する様子 馬淵光信画『吉日増見鑑』(浅川征一郎編『太平文庫24 宝暦期上方子供絵本十種』大平書屋 1994年)
- 図13 十軒店の雛市の様子① 作者不明『熙代勝覧』(山本博文『江戸時代「原寸大」絵画資料で読み解く江戸時代』小学館 2006年)
- 図14 十軒店の雛市の様子② 図21と同じ
- 図15 京都の雛市の様子 速水春曉斎『諸国図会 年中行事大成 卷之二之上』(福原敏男解説『版本地史大系21 P.177 臨川書店 2004年
- 図16 立雛 暁鐘成編・画『童子往来百家通』(石川松太郎監修『往来物大系第100巻』大空社 1996年
- 図17 雛飾りの様子 木村繁雄編『新增 女諸礼綾錦』(相川仁童『江戸時代女性文庫40』大空社 1995年)
- 図18 「見振十二思ひ月」「三月」歌川国芳 東京都立図書館デジタルライブラリー貴重資料画像データベースより 東京都立図書館蔵
- 図19 雛女夫桃の細眉(部分) 三代目歌川豊国 東京都立図書館デジタルライブラリー貴重資料画像デー

タベースより 東京都立図書館蔵

図20 五節句之内さくら月 三代目歌川豊国 東京都立図書館デジタルライブラリー貴重資料画像データベースより 東京都立図書館蔵